

吉岡晶子

●外で描こう

一月のある日、数名の子どもたちが保育室の黒板全面を使ってチョークで絵を描いていました。手がチョークだらけになつていて、とても楽しそうでした。

この楽しさをもつと広い空間で思い切り味わわせてあげたいと思い、「お庭でやってみる?」と提案してみました。保育室前のコンクリート敷きのたたきに行つて「ここなら描いても大丈夫よ」と伝えると、子どもたちは「え? いいの?」といふ戸惑いの反応でした。絵を描くとは思っていないところに描いてもよいと言わされて、子どもた

ちは一瞬「どういうこと?」という顔。「消えるところには描いても大丈夫よ」と言いながらチョークで線を描き、たわしでこすつてみて「ほらね。これでこすつて消えるところなら大丈夫よ」と伝えました。子どもたちは「そういうことか」と、面白そうというようなホツとするような表情になりました。いつたんその躊躇ちゆうしょから解き放たれると、チョークで線を引いたり塗り込んだりし始めました。「ここはどうかな」と消せるかどうか確かめながら、少しづつ描く場を広げていきました。

普通のチョークの倍以上もある太いチヨークも、白、黄色、ピンク、水色、緑、茶、と色数を増やし



て出してみました。子どもたちはすぐに手に取り、使い始めました。太いので力も入りやすく筆圧も十分、色がはつきります。線が線路になつて長く伸びたり、友達の描いた線とつながつたりするようになりました。K夫が「ここは海ね」と言つたので、私も「ここは山にしようかな」などつぶやきながらしやがんで描いていると、Y夫は「ビルも描いてみた」など言い、線だけでなくそれぞれにイメージをもつて描くようになりました。

しばらくすると、Y夫は園庭の土の上に描いてみて「描ける」とうれしそうに言い、土をたわしでこすつて、にこにこ笑つっていました。K夫も、保育室の出入り口にある手すりなどいろいろなところに描いてはこすり、描いてはこすり、「ここも大丈夫だよ」「ここも消えるよ」と大発見のようによつと報告し合つていました。

チヨークには、クレヨンや絵の具と違つて消すことができる面白さがあるのでしょう。途中からたわしを握つていろいろ場所を変えて試している

様子から面白さ、楽しさが伝わってきました。どこに描いてもよいというのではなく、消せるところには描いてもよいという条件が、試してみる、やつてみるという動きを引き出していたようです。あとで気付いたのですが、園庭の奥にある物置の壁や塀、ジャングルジムやゴミ箱などにもチヨークの跡がありました。

● プラタナスもきれいになつた

次の日、K夫が「先生、見て！　きれいだよ」と保育室に私を呼びに来ました。行つてみると、保育室前の太いプラタナスの幹にチヨークで色が塗つてありました。木肌がでこぼこしているのでチヨークがまだら模様になり、とてもきれいでした。しつかり塗り込むというよりは、チヨークをこすると色づくこと、チヨークの粉の色を楽しんでいるようでした。「きれいだねー」と感心すると、R子は「ここもきれいなの」と、木の根元に落ちている色とりどりのチヨークの粉を指で触り

ながら教えてくれました。チョークを幹にこする
とバラバラとチョークの粉が下に落ち、白、黄色、
水色、ピンク、いろいろいろな色が混じつてとても
きれいでした。

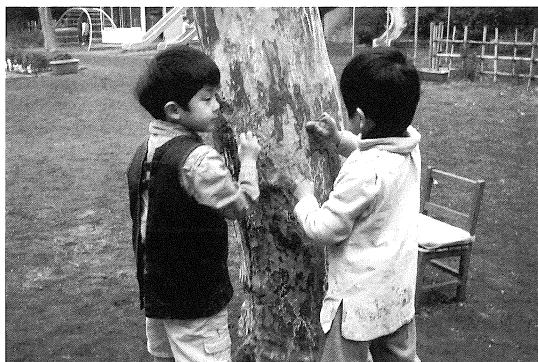
この時期は木々の葉も落ち、草花も冬枯れ。園
庭は全体に色がくすみがちで寂しい風景です。そ
の中での鮮やかなチョークの色は、パツと花が咲
いたかのようでした。子どもたちを、明るい気持
ちにさせてくれる空間になっていました。園庭の
遠くにある年少組の方からも、きれいに印象深く
見えたそうです。

●色が変わる

三日目。プラタナスの幹は、昨日の続きでしょ
うか、チョークでしつかり色濃く塗り重ねられて
いました。

K夫が「先生、ピンクのチョークは水にぬれる
と赤になつたよ」と興奮気味に報告に来ました。
「青も緑になる!」など大きな声も聞こえてきま

した。「どれどれ
見せて」と行つて
みると、K夫は
「ホラ、これ」と
水でぬれたチョー
クを見せてくれま
した。プラタナス
の幹にチョークで
色を塗り、そこに
水をつけた部分を
指さして「ここも
赤でしょ」と興奮
さめやらぬ勢い。他の子どもたちもいろいろな色
のチョークをたらいの水に浸して変わり具合を見
ていきました。面白そうと思ったので、私もチョー
クを水に浸して試してみると、確かに色がサツと
変わります。そしてチョークからは小さな空気の
泡が出ました。驚いてじつと見ていると、K夫は
「シユワッ! てなつてるでしょ」「お風呂の



(入浴剤のこと) みたいでしょ」と自慢そうに言いました。「ぼくも気がついたよ、大発見でしょう」と言いたげでした。「でもね、一回しかできなんんだよ」。一度ぬれたチョークは二度目には泡が出ないということにも気付いたのでしょうか、次々に言葉にしていました。

チョークそのものを水に浸す子どもたち、あちこちに描いたところに水をかけて変化を見る、実験コーナーのようでした。中にはクレヨンを持つてきて試している子どもたちもいました。

思い起こしてみると、五月にも、子どもたちはこのプラタナスの幹を水でぬらして幹の色が変わることを楽しんだことがありました。その時も「変わった!」「どうして?」などワクワクしていろいろなところに水をつけて試した覚えがあります。その時の体験が心のどこかに残っていたのでしょうか。

き、面白くなり、さらに動きを引き出されたようです。変わる面白さや消える不思議など瞬間の変化は、驚きや発見、喜びを感じさせてくれます。しかも自分がかかわったことで変化する感動は代えがたいものでしょう。八か月前の五月に味わつた、プラタナスの幹の色が変わる体験もすぐに変化する面白さでした。この時の驚き、心躍らせる体験が長い時間を経てここにつながつていたことから、子どもたちの日々の小さな体験がみんな活きていくこと、積み重なっていることに改めて気付かされました。

この大きなプラタナスの木は保育室の前に、でんと構えて立つており、『やつてもいいよ』、『試してごらん』と語りかけているようです。

子どもたちのいろいろな思いや気持ちを受け止めてくれる頼もしい仲間のような存在になつていきました。

予想しなかつたことが起り、子どもたちは驚

(お茶の水女子大学附属幼稚園)